

雲仙市の キリシタン関連文化遺産



小浜・南串山地域のキリシタン墓碑群（県指定史跡）

雲仙市には多くの史跡や文化財があります。近年「長崎と天草地方の潛伏キリシタン関連遺産」が世界遺産に登録され、キリスト教布教の歴史に関心が高まっています。雲仙市においても、キリスト教の布教と禁教の歴史があり、キリシタン墓碑や関連史跡が歴史を今日に伝えています。

どてのもと
《小浜町土手之元のキリスト教墓碑（4基）》県指定史跡



指定年月日 昭和 2年11月8日

追加年月日 昭和54年7月27日

所在地 雲仙市小浜町飛子字土手之元 414

最寄り駅 国道251号線「飛子」バス停下車 徒歩20分

畠の中の叢林にあった花十字紋入り半円柱蓋石型と無紋無銘の切妻蓋石型の2基が、昭和2年(1927)に県指定文化財に指定されました。半円柱蓋石型には慶長9年(1604)の碑銘が確認され、寝棺型では日本最古のものと考えられます。

昭和54年(1979)の周辺の環境整備の際、地中から2基の無紋無銘の切妻蓋石型の墓碑が新しく発見され、同年7月27日追加指定されました。複数の墓碑が発見されていることから、島原の乱以前にこの地域にキリスト教共同墓地があったのではないかとも推定されます。



一番右のかまぼこ型の墓碑に日本最古の碑銘が刻まれています

《南串山町のキリスト教墓碑（3基）》県指定史跡



指定年月日 昭和2年11月8日

所在地 雲仙市南串山町荒牧名字門前甲2608-1

最寄り駅 島鉄・県営バス「板引」バス停下車 徒歩30分

南串山池崎地区の畠の中にありましたが、昭和の初め頃、民家裏庭に移され、その後、昭和54年（1979）現在地に安置されました。

墓碑は3基有り、支石墓のように組まれています。上に置かれている墓碑は、扁平蓋石型で、正面に「里阿（りあ）ん」右側面に「慶長十一年（1606）」、左側面に「九月三日」と碑銘が刻まれています。大きさは長さ130cm。扁平蓋石型では日本最古のものと考えられます。この下に支石として組まれている墓碑のうち、1基は切妻蓋石型で、側面に「慶長十一年」の銘が、もう1基の側面にも「慶長十七年六月廿七日」の銘が刻んであります。



南串第一小学校近くに整備されています

しげ む た

《小浜町茂無田のキリストン墓碑》県指定史跡



指定年月日

昭和 52 年 5 月 4 日

所在地

雲仙市小浜町木場東中島 41

最寄り駅

国道 251 号線「金浜」

バス停下車

棚田を下った川沿いの小さな茂無田共同墓地の一郭に、ひっそりと所在する無紋無銘の台付樽型キリストン墓碑です。台座が墓碑と一体となっ

て据えられており、樽のような中ふくらみの形状をしていることから樽型墓碑と呼ばれています。無紋無銘ですが、大形で保存もよく、数少ない樽型墓碑として学術的価値が高いと言われています。台付樽型と呼ぶのは、ポルトガルや北アフリカにある樽型墓碑の形から推定した呼称です。

川沿いの小さな茂無田共同墓地



《小浜町椎山キリストン墓碑》県指定史跡



指定年月日 昭和 2 年 11 月 8 日

所在地

雲仙市小浜町飛子名字椎山 3464

最寄り駅

国道 251 号線「飛子」バス停下車
徒歩 20 分

個人宅の屋敷入口に祀られている小型のキリストン墓碑です。半円柱蓋石型の墓碑で、正面軸部に浅いくぼみがあり、その中に花十字の紋が彫ってあります。他方の面には、くぼみはありません。

ゆうさき
《結城（金山）城跡》

じょうあと



国見町を流れる、多比良川と土黒川に挟まれた丘陵上に築かれた城で、金山城跡とも呼ばれています。結城城と呼ばれるようになったのは、慶長7年（1602）に城主となった、キリスト教徒の結城ヨルジ弥平治に由来しています。

ルイス・フロイスの記録では、弥平治は美濃国の生まれで、畿内地方最古のキリスト教徒の一族とされています。熱心なキリスト教徒で、京都における南蛮寺（教会）の建設にも協力を惜しませんでした。

有馬晴信から知行3,000石を与えられ、有馬領の北方警備を任せられ、金山城に入城した弥平治は、このとき58歳。ここ金山の地に教会を建て、宣教師を招いて自らの信仰と神の恵みに感謝し、地域の住民にもキリスト教の信仰を勧めました。当時の金山地域では多くの住民がキリスト教信者となり、弥平治と共に祈りをささげていたと考えられています。

本丸の北側には、弥平治の入城400年を記念して、国見町郷土史会有志により十字架の記念碑が建てられています。



かまふたじょうあと

《釜蓋城跡》市指定文化財



指定年月日 平成 12年 3月 6日

所在地 雲仙市千々石町小倉名城山地区一帯

所有者 雲仙市

釜蓋城は、永祿 12年（1569）千々石大和守直員が築城しました。天正5年（1577）龍造寺隆信による島原半島攻略の際、釜蓋城も激しく攻められ、城主千々石大和守直員は自刃しました。天正遣欧少年使節の一人千々石清左衛門直員（千々石ミケル）は、釜蓋城城主千々石大和守直員の忘れ形見です。



千々石清左衛門之碑（釜蓋城跡）

千々石ミケルは、天正遣欧少年使節の正使として、1582年（天正 10年）伊東マンショ、中浦ジュリアン、原マルチノらと共にヨーロッパに渡りました。教皇グレゴリオ13世にも謁見しました。8年後無事帰国し、ヨーロッパのさまざまな文化を日本に伝えました。



ミケル像（千々石総合支所）

《雲仙地獄》



雲仙の旅館街のわき、原生沼から旧八幡地獄、八幡地獄にかけて、岩石が白くなった地獄地帯が広がります。現在、原生沼周辺では噴気活動はありませんが、珪化して白くなった岩石があることから、かつて火山活動に伴う噴気活動があったことが伺えます。

旧八幡地獄では、現在でもわずかながら噴気活動が認められますが、その荒地には植物が侵食し始めています。八幡地獄は、現在最も活動の活発な地域で、その中でも東側の大叫喰地獄と呼ばれる場所が、最も激しく噴気活動をしています。

これらのことから、雲仙地獄の噴気活動は西から東に向かって活発であり、活動地域自体が西から東へ移動しているものと思われます。

雲仙を代表する観光名所である「雲仙地獄」は、硫黄の香りが立ち込め、地の底から噴き出す蒸気と熱気が、辺り一面を覆いつくす光景は、まさに地獄そのものです。

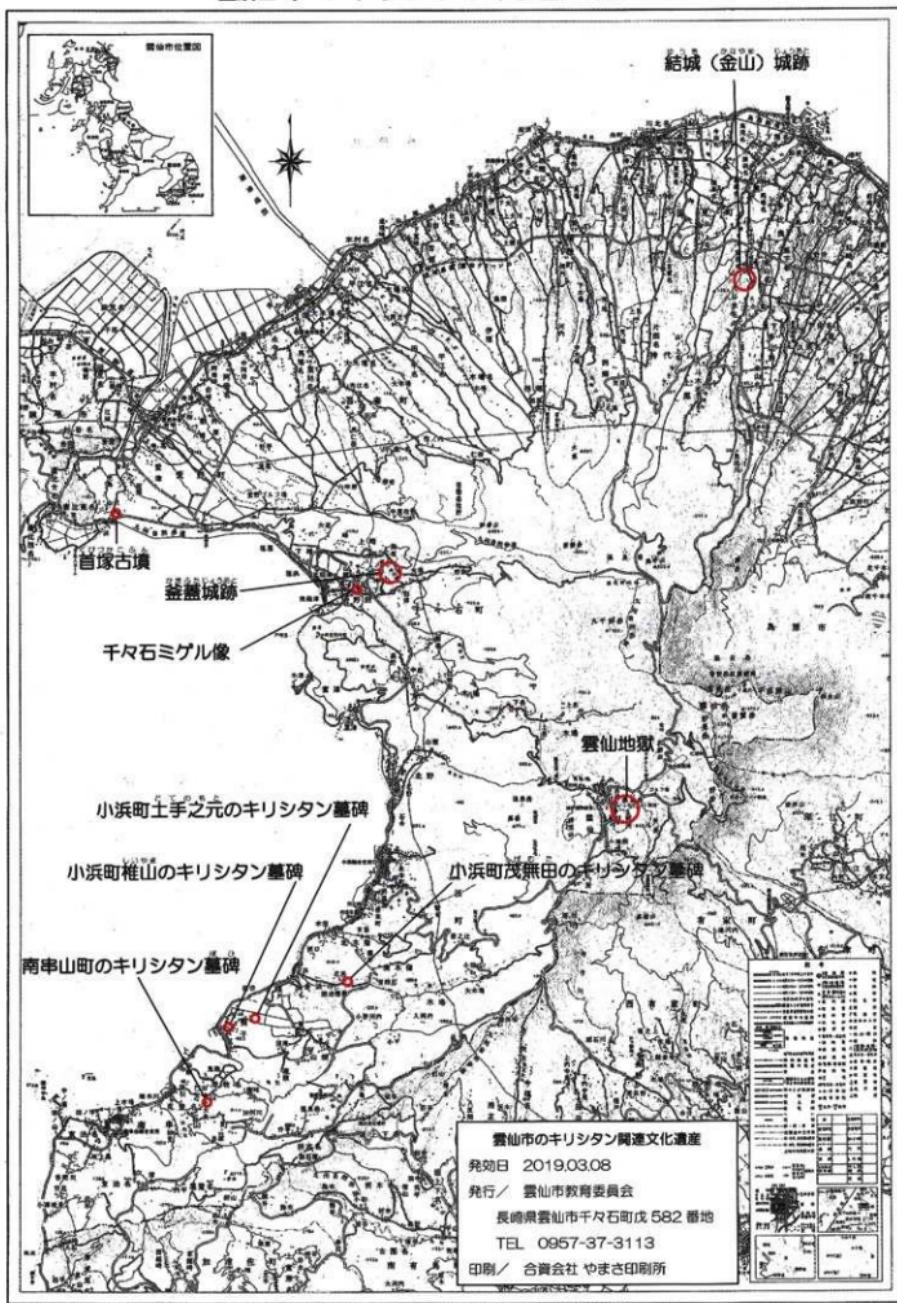
江戸時代初期（寛永年間）、キリスト教信仰捨てさせるため、拷問や処刑が行われ、キリスト教殉教の舞台となりました。地獄の一隅には雲仙地獄殉教地の碑が建てられています。

また、雲仙地獄は大叫喰地獄やお糸地獄、清七地獄など30あまりの地獄からなり、地獄ごとにさまざまな哀史や伝説が残されています。



硫黄の煙が立ち上る雲仙地獄

雲仙市のキリストン関連文化遺産



【本冊子は下記の文献等を参考として作成しました】

小浜町発行 1978年『小浜町史談』、国見町発行 1984年『国見町郷土史』、千々石町発行 1998年『千々石町郷土史』、
nagasaki ebooks『長崎県の文化財』、雲仙市教育委員会発行 2017年『雲仙市の文化財』、雲仙市ホームページ